講演　おひとりさまの老後を支えるしくみ

《やまぐち女性財団助成事業》

講師：上 野 千鶴子
東京大学大学院人文社会系研究科教授・社会学者

○おひとりさまはますます増えている！

「おひとりさま」の上野でございます。今まで「骨しの上野」「怖い女」でしたが、最近は「ほっとした、安心した」と言われる「癒しの上野」になりました。『おひとりさまの老後』は７５万部売れましたが、その約３倍の方が読んで下さったのではないでしょうか。「本当のことを言うと危険人物と言われる」世の中ですが、「みんな最後にはおひとりさまじゃないの」は本当のことです。この本はシングルのために書いたものですが、５０歳を過ぎると死別離別を問わず「シングルアゲイン」が増えてきます。「女の人生が二股に分かれたようにみえたのは、何だ、一時のことじゃないの。」この本を思いがけず既婚者がたくさん読んで下さり、その人たちは自分たちのことを「シングル予備軍」と呼んでおられます。実際にはどなたも「現役のシングル」か「シングル予備軍」のどちらかに入ります。

さて、現実に「おひとりさま」は増えています。６５歳以上では、夫婦世帯と一人世帯で半分を越えています。一人になった時に、子どもからの中途同居の誘いを「悪魔のささやき」と呼びました。「愛の踏み絵」とも言います。その場合は、きっぱり断ってあげましょうよ。元気なうちは年寄りとはそれなりに便利ですが、いったん介護が必要になると家庭は２４時間勤務、一年中休みなしの職場となります。結果として施設に入り、帰りたくてもすでに家（建物としての）には子ども世帯が住んでいるのです。また、たとえ一人住まいであっても、それを支えてくれるしくみがなければ、家に帰れないのです。

同居率を家計で分けてみますと、金持ちと貧乏には別居率が高い。家計にゆとりがないと別居できないし、貧乏では一緒に住むゆとりもない、これを「姥捨て別居」といいます。中間の人に同居率が高く、これを「しぶしぶ同居」といいます。

○「おひとりさまの老後」は不安がいっぱい？

さて、現在のおひとりさまの老後は不安がいっぱいです。女性の場合は貧困、男性の場合は孤独です。でも備えあれば憂いなし。自分の住まい（空間）とそこそこのおカネがあればひとりでも生きていけます。

団塊の世代は持ち家率が高いという統計が出ています。夫を看取れば半分は妻のものです。不動産はできるだけ自分の名義にしておくのもよいですね。「一人では寂しいでしょう」は、余計なお世話です。もし一人で寂しいと思うときには、電話やメールなどをいつでもできる友人がいればよいのです。また、おカネについてですが、持ち家などの資産は自分一代で使いつぶす覚悟があれば、年金プラスアルファの収入があれば生きていける。「自分は自分で生きていくから子供には資産は残さない」か「お世話をしてもらうが、子供に資産は残す」の選択を示し、子供世帯にも覚悟をしてもらうことです。

会社に定年があるように、家族時間にも親業の定年や配偶者との死別など、必ず終わりがくる。残るのは自分時間ですが、しかしこれは孤独な時間ではありません。自分が自分でいられる時間・空間・仲間があればOKです。また、加齢現象は必ず起こります。誰でも年をとれば一種の中途障害者になります。障害者の生き方は高齢者の先を行くモデルだと私は思っています。ですから最近のPPK運動（ピンピンコロリ）には疑問を持っています。予定通りいかないのが死というものです。必ず人は他人さまのお世話になって死ぬときがきます。それを恥と思わないことです。また、「かわいいおばあちゃん」になりたい、という人がいますが、上野のように「かわいげのない女」はお世話をしてもらえないのでしょうか。介護保険制度とは「年寄りがかわいくても、かわいくなくても」お世話をしてもらえる権利のことなのです。

○当事者主権とは何か

さて、「当事者主権」ということを考えましょう。主権とは、それ以上ない最高の権利です。どんな状態になっても自分のことは自分で決める、私が権利の主体であるということです。日本の高齢者は、今まで「当事者」になってきませんでした。自分のニーズを満たすのには「自助」「公助」「共助」があります。助けて、と言った時、公（官）ばかりに頼っていては「アカン(官)」のです。共助は、これを市民社会・共・協（コモン）セクターといい、これは信頼できると私は思っています。ケアの受け手と与え手双方の利益が最大化するような、持続可能な事業の、ソフトとハード両面にわたる経営管理（福祉経営）のあり方が、私の研究テーマになりました。

○協セクターの市民事業体の実践と実験

生協・NPO・農協婦人部などを市民事業体とよびます。「ニーズに一番近いところにあり、地域から撤退できない立場にいる人々が、自分の受けたいサービスの責任と報酬を伴った、サービスの担い手になる」こと、これを住民参加型地域福祉、「社会的事業」とよびます。

このような協セクターでは、地域住民が参加していて、経営効率も悪くない。労働分配率が良く、しかも自分の働き方を自分で決めることができ、定年がないのです。これを先駆的にやってきた神奈川生活クラブ生協ワーカーズコレクティブは、１９８７年に始まり、事業高・団体数・利用者数はうなぎのぼり、バブルがはじけた不況の中でもどんどん伸びた事業です。経営からみると非常に成功です。また、九州のグリーンコープ連合では、１９９５年、全組合員から一人１００円ずつ集め、それをもとに原資４億円を作り、事業を始める人に、毎年６０万の助成金を無償で渡しました。事務所もタダ同然で貸し、さまざまな面で支援した。立派なことです。市民事業には志と体力、プラスお金とインフラが必要です。これらの事業を始めた人は、睡眠時間は削り、家事は手抜き、残業、土日出勤で働いている現状ですが、これではとうてい後が続かない。だからこそ継続可能な経営が必要となってきます。

社会福祉法人になった厚木市の「MOMO」では、不況で傾いた企業の独身寮を借り上げ、バリアフリーに改装し、ケアサービスを提供するサービスステーションを設けました。入居者が要介護になればケアマネをつけ、カスタムメイドのプランを作る。施設とサービスが一体化しないやり方で、比べて選ぶ、という方法ですが、よほどの自信がないとできないことです。評判が良かったので、また次の施設も作り、すでに満杯になりました。地域に茶の間のようなものがあれば、それぞれの家から通うことができる。送迎サービスもある。ディサービスのできるスペースがあり、普通の年金の範囲で利用できるグループホームもあります。生協組合員から始まった又木京子さんは、２５０人から少額金融を集め４億の原資を作り、利息をつけて返しました。よほどの信用がないとできないことです。

○小規模多機能共生型施設とは？

富山型＝小規模多機能共生型施設の『このゆびとーまれ』の例をお話します。１９９３年から始まったのですが、民家を改造し、８～１５人の規模で、通いと泊まりと暮らし、時には看取りにわたる多機能のサービスを提供し、高齢者から障害者・子供まで扱いました。走り回る子供がいる中で１５年間無事故です。すばらしい実践といえます。職員には大卒男性もいます。年寄りと子供を一緒にしたら助成金が出ないという縦割りの福祉制度を乗り越え、富山型福祉特区を申請し、ごれを全国化させた稀有な例です。創業資金は持ち出し、寄付を集めてきましたが、ようやく２００４年、県と市が創業支援制度を作ることになり、仲間を増やすため起業家セミナーを実施、この受講生の起業化率は６割です。県・市が新築・増築にはお金を出す制度を作ると、早速増築に乗り出し、適用第一号となりました。

都市型の共助の例として、COCO湘南台や、日暮里コミュニティーセンターなど、さまざまな良い実践が増えてきています。

○在宅で死ぬには？

最近、私は、在宅で最後を迎えたいと思うようになりました。人は急には死ねない、ゆっくりと死んでいく。だから、２４時間巡回の看取り保障があれば、今いるところで一人で老いて死んで行ける。そのためには３つの支援サービス、すなわち訪問介護・訪問医療・訪問看護が必要です。これこそ公共団体の出番です。地域の休眠人材（退職後の看護師・医師・介護士など）など資格のある人と契約を結び、インフラや設備を提供するのです。

○そしてわが町は・・・？

私の住んでいる東京は、とてもQOL（生活の質）の低い町です。定年後はどこに行けばよいでしょう。基準は「おひとりさまの老後」を支えてくれる地域介護資源があるか、ということです。「悪魔のささやき」を受けたとき、「気持ちは嬉しいが私はここを動かん。なぜならばこの土地には私を支えてくれる人のネットワークと地域の介護支援があるから」ときっぱり言えるでしょうか。その条件は共助の事業が育っているか、それを育てる気持ちを公共団体や自治体が持っているか、です。さて、この下関はどうでしょうか？

（中野 直子）

鼎談　「大丈夫？ あなたの老後」

～安心して老いていける社会をめざして～

鼎談者：上野千鶴子・冨安兆子・亀田　博　各氏

冨安 兆子

冨安：「おひとりさま」の問題は「女性の課題」とされてきましたが、今や男性のシングルや介護をされる方も急増しており、女性も男性も、ひとりを如何に生きるか、考える必要に迫られています。

亀田さんは、行政に携われるかたわら、難病のおつれあいの介護をされたとか・・・。

亀田：発病から14年間、食事、排泄の介助、痰の吸引など、介護は大変でした。介護保険は最後の年だけで、経済的負担も多く・・。

ご講演で気になったのは、「この町は、介護をされる者にとっていい町であるか？」ということです。

まず、「協セクター」というのがあまり無い町です。市内にはデイサービスの施設が86あり、経営しているのは生協が１つ、NPOが5つ、医療法人と社会福祉法人が35（うち社協２）、あとは民間企業です。過半数が利潤を追求するもので、そこが問題です。

上野：「協セクター」は、共助の理念をもって、市民が協同で、非営利で運営する社会事業体です。比べて選んで、本当に欲しい介護一共助けの志をもって駆け出した方たちにこそ、老いを委ねたいというのが私の強い気持ちです。制度を支えるのは人です。

民間企業では、内部の経営は秘密で全く分かりません。NPOなど民間非営利団体は公益団体ですから、経理も公開しなければならず、減多なことはできません。市民が始めて、市民が監視する。こうした非営利の事業を公共団体が真面目に育てようと考えてくださってもいいのでは、というのが私の思いです。

亀田：施設の家庭化、家庭の施設化が私の理想ですが、そういう所で経営に携わり、また、利用もできたらと思いますね。

上野：起業なさりたいのですね。すばらしい。そういう方を市民事業家、社会事業家というのです。まず創業支援の仕組みを市で作って、ご自分が適用の対象になられ、どうぞ市民事業体を興してください。自分も助かるが、人助けもする、これが共助です。

総量規制などしないで、事業者を増やし、健全な市場競争をしていただきたいと思っています。

亀田：制限されているのは、特養と認知症のグループホームです。共倒れになったら困るというのですが、待機者は特養でも1,000人近くおります。高齢化率が27.1％と高い本市ですから、志のある方はどんどんやっていただきたいと思っています。

亀田 博

問題は、高齢者の実態把握が不十分なことで、行政は市民のニーズをもっと知る必要があります。

冨安：市民をどう応援するか、お金を助成する方法もありますが、空き部屋などを利用して、教育機関として情報や方法を伝授するといった方策もあります。そこから起ち上がってくる人が、一人か二人、三人となればいいなと思っています。

上野：富山型小規模、多機能、地域密着の起業家セミナーは、「このゆびとーまれ」が、県と市を抱き込んで、共催事業でプログラムをお作りになりました。

亀田：高齢者の不安として、「女性はお金、男性は孤独」が挙げられていましたが、「病気」もあると思います。下関でも、毎年60人くらい自殺者がおります（うち高齢者が3割）。お金と病と孤独の問題が、高齢者の課題だと思っています。

冨安：自殺率最多だった秋田県では、これに真剣に取り組み、行政側と秋田大学の学生が協力して、見事に数値を下げました。ダメだと諦めてしまうと駄目ですね。突破口を見つけて、誰かができるところから動き、結果的に、今言われたようなことができればいいですね。「それができれば言うことない。でも誰がどうするの？」と、二の足を踏んでしまうことにならないように。

（大香 芳子）

hemoi
No.6
２００８・12

ホーモイ通信

高齢社会をよくする下関女性の会
代表 田 中 隆 子
TEL/FAX 083-253-4892

ますますふえる「おひとりさま」

平成２０年１０月４日、ベストセラー「おひとりさまの老後」の著者で社会学者の上野千鶴子先生をお招きし、盛大な講演会を梅光学院大学のスタージェスホールで開催することができました。

高齢女性の5人に1人が「おひとりさま」という時代に突入している今、上野千鶴子先生に「それにどう対処していけばいいのか？どうすれば安心して老いと付き合っていけるか、そして心おきなく死ねるか？」を問いながら、その心構えや覚悟、今の社会に必要な情報やハイテクの時代ならではの便利なツールまで、巾広く先達や専門家の意見など交えて講演していただきました。講演後の鼎談も示唆に富んだものになりました。

多くの来場者の方々と有意義な時を共有できたことを感謝いたします。

田中代表挨拶

書籍販売

たくさんの来場者

*「老いる準備」
*「当時者主権」
*「おひとりさまの老後」
*「近代家族の成立と終焉」

講演会ポスター

上野千鶴子先生を囲んで交流会

老後に対する不安

健康	６３％	経済	３１％	孤独	５％
最期	４７％	暮らし方	２２％		
介護	４３％	人間関係	１０％		

アンケートから（28%回収率）